

第23回 文学館演習 ―日本近代文学資料の探索と処理―

2019年度 講義概要

2019年8月20日(火)～8月24日(土) 於：日本近代文学館講堂

近代文学の勉強法を知りたい人は必修！
使用する資料はすべて本物です！
博物館実習・近代文学の単位にできます！

講義概要

1. 総論

①近代文学館とは

坂上弘（館理事長）

②日本近代文学館の所蔵資料とその意義

中島国彦（早稲田大学名誉教授）

50年以上もの歴史の中で、当館にはおびただしい資料が収蔵されることになった。資料を守る、それを後世に伝える、その強い意志がすばらしいコレクションを生み出している。資料は「もの」ではない。それに対する「敬意」とそこから生まれる「文学へのよこび」があって初めて、光り輝く。その歴史を振り返り、将来への展望を考えていきたい。

2. 資料の収集と活用

①資料を活用する研究法（講義・演習） 自筆資料（書簡・ノート）

安藤宏（東京大学教授）

近代文学の資料は「活字」になったものとならなかったものとの間に決定的な性格の違いがある。書簡、日記、メモ、ノートなど、「活字」にはなかった直筆資料と、実際に世に問われた作品との関係をどのように論じるか、というのは研究の大きな課題で、自覚的な方法意識が求められる。作者の直筆資料を調査、研究する方法について、館に収蔵されている太宰治の資料を中心に、わかりやすく解説したい。

②資料を活用する研究法（講義・演習） 図書

須田喜代次（大妻女子大学教授）

近年はインターネット上での配信という例も出てきましたが、基本的に文学作品は、新聞・雑誌・図書といった〈容れもの〉に入れられて、読者の元に届けられます。作品はそうした〈容れもの〉と無関係に存在するわけではありません。今回は、そのうち図書という〈容れもの〉について考えてみたいと思います。具体的には森鷗外『即興詩人』を素材とします。

③資料を活用する研究法（講義・演習） 雑誌

宗像和重（早稲田大学教授）

近代文学の作品は、一般に、雑誌や新聞などに発表され（初出）、著者の推敲を経て、あらためて単行本として刊行される（初版・初刊）。その間に、本文の異同が生じることも少なくないが、こうした原稿から初出、そして著書へという本文の位置づけを、どう考えればよいだろうか。また、雑誌は単に作品発表の場であるだけでなく、明治期の『早稲田文学』や『文章世界』が自然主義の牙城となったように、その性格や編集方針、あるいは編集者が作品と密接に関わることも多い。文字通り、「雑誌の宝庫」である日本近代文学館の資料を中心として、こうした雑誌と近代文学との関わりを考えてみたい。

④資料を活用する研究法（講義・演習） 新聞

山田俊治（横浜市立大学名誉教授）

近代社会に固有の文学形式である小説は、どのように成立したのであろう。その成立に当たり、近代社会の主要なマスメディアであった新聞が果たした役割は、無視することができない。新聞が小説を復活させる原動力となり、新たな出版形態と結びついて流行現象となったのである。そうした過程を、文学館所蔵の草双紙類を具体的に参照しながら、『小説神髓』によって小説が言語芸術となるまでの時代について考えてみようと思う。

資料の

声を聞く―

2017年 開館50年

公益財団法人 日本近代文学館

THE MUSEUM OF MODERN JAPANESE LITERATURE
Komaba, TOKYO

153-0041 東京都目黒区駒場 4-3-55

(駒場公園内)

tel 03-3468-4181

<http://www.bungakukan.or.jp/>



図書・雑誌の利用（実習）

書庫には、日本近代文学館にしか所蔵されていない貴重な図書・雑誌が数多くあります。普段は職員以外の入庫はできませんが、演習日は特別です。②・③の講義をふまえ、実際に書庫に入って図書・雑誌を手にとり、自由なテーマでミニレポートを書いてみましょう。（スリッパ持参ください）

挿絵・写真資料の調査・保存（実習）

文学館で所蔵している雑誌の中から、挿絵・写真ページをピックアップし、写真利用カードを作ります。出版物やテレビ番組などで利用される文学写真の、整理方法の一例です。

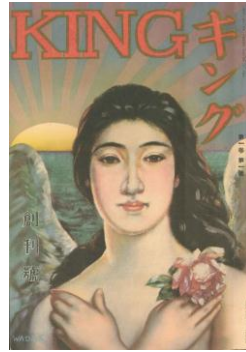
肉筆資料の解説（実習）

所蔵する肉筆資料を公開する機会を設けることも、文学館の大切な仕事です。この時間では館報「日本近代文学館」の例にならって文学者の手紙を翻刻してみましょ。くずし字解説に挑戦！

3. 文学をめぐる問題

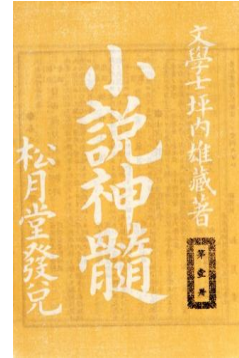
①海外における日本文学の研究（講義・演習）
和田博文（東京女子大学教授）

海外の研究者との国際的共同研究は、ここ20年ほどの間に活性化してきた。21世紀初頭からのヨーロッパや東アジアの研究者との共同研究に触れながら、東アジアのエリアにおける研究の今後を展望する。昭和文学会と中国日本文学研究会の姉妹学会締結についても紹介する。



②文学と大衆（講義・演習）
宮内淳子（近代文学研究者）

「大衆」が示す意味は広い。ここでは1920年代と1950年代の2つの時期に絞り、それぞれにおいて、「大衆」と呼ばれる存在が文学状況にもたらした影響を検証してみたい。まず、1920年代は、教育の普及や出版事業の拡大等により読書が国民の間に広まって、『キング』創刊や『現代大衆文学全集』刊行などに結びついた。このときの「大衆」は、久しく文学を独占していたエリート男性たちと相対する存在であった。戦後になると「大衆」とエリート層を区切る境界が前ほど明確でなくなり、さらに活字メディア以外の要素が大衆文化を特徴づけるようになる。1950年代の「大衆」については、こうした状況を積極的に取り入れて文学に新たな展開を求めた花田清輝の評論を手掛かりに考える。



4. 文学の周辺(1)

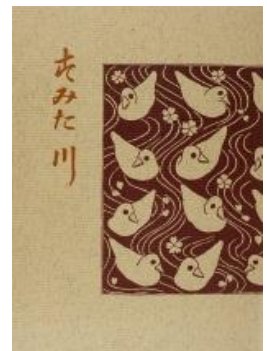
①文学と戯曲（講義・演習）
石川巧（立教大学教授）

1970年代までの文芸雑誌には小説と同じように著名作家の戯曲が並んでいた。なかには上演を目的とした作品もあったが、主流はいわゆるレーゼドラマ（読む戯曲）だった。当時の読者は活字を通して仮想空間を組み立て、目に見えない劇場で演じられる世界を愉しむことができたのである。また、新しい世代には同じ内容の作品を小説と戯曲に書き分けたり、ひとつの作品に小説と戯曲の表現を混在させたりする作家もいる。だが、近代文学研究の領域においてレーゼドラマが考察の対象となることは極めて稀である。この講義では木下圭太郎、久保田万太郎といった大正作家の戯曲を「設定」「演出」「ト書き」といった観点から分析することで、新たな文学研究の可能性を探りたい。



②出版メディアの戦略・検閲（講義・演習）
紅野謙介（日本大学教授）

伊藤整がD・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』翻訳を刊行したのが1950年。版元は戦前から良心的な文芸出版で知られる小山書店であった。しかし、これが刑法175条違反として摘発され、チャタレイ裁判が始まる。同時に『群像』では大岡昇平「武蔵野夫人」が連載され、ベストセラーとなり、映画化までされることになる。こうした一連の出来事を通して、占領末期における検閲の問題と作家、出版界の葛藤をとらえてみたい。



5. 資料の保存・公開・展観

①資料の保存・修理（実習）

和本の四つ目綴じ補修をします。文学館で所蔵している「中里介山文庫」（中里介山旧蔵書）を使用します。（太めの縫い針一本持参ください）

②資料の公開・展観（実習）

文学館が所蔵する資料をいかに公開・展観し、文学の魅力をいかに伝えるか、展覧会などを例に考えてみましょう。

6. 文学の周辺(2)

①文学と映画（講義・演習）
十重田裕一（早稲田大学教授）

日本において文学と映画がどのように遭遇したかを、1920年代に焦点をあてて考えてみたい。1920年代日本では、さまざまな芸術間の交流が顕著にみられるようになり、新しい表現の可能性を模索する状況が呈していた。なかでも、文学と映画の交流はとりわけ盛んに行われ、モダニズムの作家を中心に、映画の表現を意識した新しい小説の実験が試みられていた。その実験の一端を、同時代の具体的な映画を紹介しつつ検討する。

②文学と美術・音楽（講義・演習）
中島国彦（早稲田大学名誉教授）

日本の近代文学の歩みは、同時代の美術や音楽と深いつながりのもとに形成されている。今年度は、永井荷風を取り上げ、文学作品が美術や音楽とどう絡まるのかを考えていきたい。荷風の享受した日本の伝統芸術（江戸俗曲・浮世絵など）や、西洋芸術（絵画や音楽など）を跡付けることは、この問題を考える格好の材料となっている。あわせて、同時代の芸術家とのつながり、芸術環境についても紹介したい。

